

牧師室から (2022.5.15)

今回も犬の話である。犬好きな人ならよいが、そうでなければ、もう違う話題にしてほしいと思われるかもしれない。

うちのメグが一歳を過ぎたが、最近少し吠えるようになってきた。吠え声にも何種類かあって、何かお願いするときには高めの声、不審なことがあるときには低めの唸るような声を出す。

以前東北にいた頃、まだ前の犬であるアイネはいなかったが、実家にシーザーがいて、また教会の隣の家に秋田犬がいた。今ではあまり見かけないが、当時バウリングという犬の声を翻訳する機械が出回ったことがあった。それが結構高価であったが、ブームが過ぎた頃にホームセンターで3割ぐらいの値段に値引きされていたので、買ってしまった。その機械は犬に発信機をつけ、人間が受信機を持っていて、犬が吠えた時にその声が手元で翻訳されてみるができるシステムである。設定条件として犬の種類、年齢、性別などを入力する。箱には、アメリカの〇〇博士が開発したというお墨付きがあって、なんとも胡散臭いところが気に入って買ってしまったのである。とりあえず隣の人に協力を得てその秋田犬の声を翻訳してみることにした。なぜかという、そもそも秋田犬というのは忠犬ハチ公のように飼い主には忠実であるか、その反面そうでない人にはよく吠えるのである。その犬は庭に放し飼いにしてあったので、私どもを見かけるたびにけたたましく吠えるのであった。隣の人の勧めでおやつを与えて犬に気に入ってもらおうとしたがそれでも駄目であった。ところがその犬(シロ)のけたたましい吠え声を収録してみたところ、受信機にはなんと「仲良くしようよ」という表示がでた。それからまた実家の犬が来た時には、その犬(ジョイ)に発信機つけてみたが、鬱陶しそうだったので、実験を止めてしまった。

そこで思ったのだが、犬のほうも人間が何と言っているのか気になるころであろう。わたしもそれほど多く犬を飼ったわけではないが、やはりそれぞれに個性がある。人間の言葉の分かる数も違うし、また空気の読める犬とそうでないものもいた。いずれにしても犬は太古から人間に随伴している友達である。私の人生のうちで、人間より短い寿命を持った犬たちとの出会いと共同生活、そして別れはそれぞれ心に残っており、忘れることのできない貴重なドラマである。メグは私たちにとって最後の飼い犬となるであろうが、大切な時間を共に生きたいと思っている。

(鈴木淳一牧師)